**日本現代音楽協会の**Web版NEW COMPOSERに掲載される

**「宇宙脳が作曲した今度の出し物「死生共存」について」と、その続き**

１）現実の音楽や音楽史に視界を限られれば、数多くの豪華な楽曲や天才的な作曲家や演奏家、そしてその他を含めた全体的音楽文化・文明の豊穣さに圧倒される思いだ。だが一方、音楽の潜在能力を考えると未現出の楽曲やそれに始まる演奏や楽器や音響手段の多様性は私のような菲才な者に想像できる範囲でも既出のそれをはるかに超え、さらに実際は誰も想像し得ない彼方にまで広がっているに違いない。地球上の自然からして動植物の多様性は驚くべきものがあるが、各自然物にとっての自然（＝天然）の無尽蔵の潜在力からみれば無限小の筈だ。むしろそれほど高い潜在力があってこそいろいろな個性達の現出と相成り得たのだ。あの「もういいとこ出尽くしちゃっている」「我々は既存の要素を新規に組み合わせることぐらいしか」といった現代作曲家の発言は謙虚なようでいて実は傲慢ではないか。それはポロックが「ピカソの奴が全部やってしまった」と言うのと同じだ。そのピカソの本音は「人生は短く藝術は長し！多くの事をやり残し、多くの事に気づかずじまいだった」だろう。

２）一般的に人間というものは「現れ」信仰者だ。彼らは“目の前の手で触れる石ころ”ほど確実な存在はない、とする。スポーツ選手が勝ちに、女性が若さに等々、一般に結果に拘るのも同根で、“現象＝存在”の思いからだろう。だから鏡の手前の自分自身よりも鏡や他者の目に映った自分の方を大事にする。でなければ「カッコイイ」とか「輝く」という言葉は冷やかしにしかならない筈だ。原因とか努力とか幸運とかに拘るのも結果（＝現象＝存在）と関係づけてのことだ。だからこそ、努力は簡単に偽りに変わる。女性の美容整形やロシアの国ぐるみのドーピングもその例だ。こと芸術、わけても音楽に至ってはもともと鏡の中の存在のようなところがあって、すべてがすべてウソの塊=デッチアゲという見方も在り得るのだ。演奏行為は演劇と違って「役つくり」すら必要ない。楽譜の上で既に役はつくられているから音化して音楽的に磨いてゆけばいいだけの話だ。役者以上に演奏家に求められているのは、初音ミクがその権化であるところの透明性ある。あの思い入れたっぷりのフルトヴェングラーだって例外ではない。

３）さて、現代は超が付くほどの情報時代だ。情報の箱である鏡はいやがうえにも大事にされるが、どっこい鏡の外の目や頭や心や、要するに意識が無ければ鏡すらあり得ない。更に、“意識”が大事なら、我々人間にとって、まずは“脳”だ。そこでだが、普通、その脳は個々人の所有物、あるいは個人自身とすら思われている。現代においては、個人を超えた情報集積回路のようなものが社会に役立つ優秀な人材として求められつつあるようだ。が、それらはいずれもエゴ、後者も社会のエゴイズムの産物だ。

４）話を冒頭からのつながりに戻すが、私ＬＭは我が脳を自分自身から解放し、持てる宇宙的思惟力-それは宇宙の根拠から来ている-を存分に発揮させたい。人々がまだ目にしたこともない未来からの恐竜「ゲルニカ」の登場。芸術的業は、とりわけ作曲の業はそれを強力に促してくれる。それは悪行か？いや！この現代文明を破壊しようとする「シン・ゴジラ」があれだけもてるところを見ると、悪で以て悪をやっつける正義の味方かも？

５）だが、人々と違って私だけが脳を宇宙へと解放しても受容者（鑑賞サイド）はついてゆけるのだろうか？

脳は意識に現出する世界を表舞台とするがそれは無意識の舞台裏に支えられている。脳自体が生命活動であるがその活動の中に表舞台の意識活動とは別種の意識活動があり、それは通常は「個人個人の意識に上って来ない」ままなので「無意識」とも呼ばれ、また「所有者」から抑圧されていることにもなるのだろう。

作曲者はそれを宇宙へと解放しようとする。

一方、音楽の受容者は、集中して鑑賞する立場にせよ、聞こえるに任せる立場にせよ、あるいは転寝（うたたね）聴きの立場にせよ、基本的に受け身である。受け身であるということは“怠けている＊”ということであり、自己放棄にもつながるのである。脳はその間、所有主の縛りから解放され、宇宙を放浪する身と成り得る。（＊“怠け”の重要さについては「あの世から描かれし“怠け女”」という曲をユーチューブなどにアップしているし、怠けの必要性については「新年２０１７ご挨拶」に書き込んであります。）

あの故別宮貞夫が「長い事、ブルックナーのどこが良いのかわからなかったが『環境音楽として聴けばいい』と勧められそうしたら聴けるようになった」と言っていたが、正直なところだろう。

６）脳は、その容積から言ったら宇宙の中の無限小部分であるが、宇宙人のそれと共に宇宙の中の断トツに精密な活動部位なのではなかろうか。

私の提出楽曲は、パソコン、あるいは演奏者により音化され、それは一塊の音楽として対象化もされうることは確かだ。だが、それは瞬時に咀嚼消化吸収されて脳の生命活動に参入する。その生命活動の中では常に無意識活動が-人が寝ている時にさえ、あるいは時にこそ-働いており、それが音楽聴取の際には偉く刺激されるのであろう。そのことが大変重要だ。私が好い音楽、好い楽曲とするのは、まさに性能の高さによる。

７）勿論、それは、厳密に言えば音楽の、あるいは楽曲の必要条件であるにとどまり、「十分条件も満たしている」とは言い難い。妙“薬”口に苦しというけれど苦い“薬”は吐き出されてしまうのだ（この言いざまだと「現代音楽がマイナージャンルである」ことの口実みたいになってしまうが、現代音楽は苦いだけで薬の役目を果たせないか、果たそうともしないか、悪い副作用において有能である、という場合が多いような気がする）。

先に行った無意識の領域でたいそうな働きを成しうるにせよ、そこは音楽なのだから、お薬なんかではなく、食べ物らしいもの、味にも魅力のある食して楽しいものでありたい。だが、目をも喜ばす豪華絢爛たる料理となると考え物だ。贅沢この上ない料理はとかく体に悪い。瞬間的な華々しさで意識を喜ばせはしても、脳や、意識の舞台裏、無意識の領域には悪い影響を及ぼすことの方が多いのではなかろうか。そこには二律背反的な機構がはたらいているのかもしれないし、表舞台と舞台裏の両方の条件を満たすのはまさに神業！

「ああ、道遠し」といったところであろうか？

８）いや、待てよ！その二律背反的構造が、様々な動植物の個性を産み出すのに寄与しており、様々な脳の出現にも、様々に個性的な楽曲の出現にも寄与しているのかもしれないではないか？表を採るか裏を採るかではない。片方だけでは個は一切成立しない。精子と卵子、男と女が両方いて、出会い合体するということがなければ子は生まれない道理と同じでこと。

９）今回の論考は、宇宙がその根拠から与えられている活動力（そこには、既にその逆の衰退性も含まれているが）に人間の営みも参画したものでありたく、その結実態として音楽作品もその活動力に与ったものでありたい、という思いで綴ってきた。だが、そこは作曲家の仕事だとなると、なかなかのんびりしたことは言っておれなくて、始めから個を物す、即ち良い結果を実現することを目的とするため不自然な作り方をしてしまったり、そもそも各々の作曲家の思い描く理想の作品からして、あまりにも人間の嗜好に添おうとし過ぎて消費の対象にしかならないことのほうが、むしろ普通のようである。ましてや、経済活動としての商品つくり、となると私のここでいっていることなど馬耳東風。やはり作曲は人間業であり作曲家の有能さ現れれば現れたものほど、人の耳に魅力的な音楽であり楽曲や演奏である、ということに戻ってしまうのか？

１０）音楽と言うものは誰に対しても自然現象のように感じさせるところがあり、そうすると「音楽の個」というものは人がその意識的に、即ち人工的な力で区切ってやらなければ与えられない、という気になりがちなものであろう。

ところがどっこい、自然は区切る力、タクト性も持っているのである。東洋的には風や流れに純粋な生命を覚えつつ死を忘れようとするかのようであるが、死の無い生命など始めから半端なものだ。自然界に個が存在するということは、生に抗する力の総体である「死」、その「死にゆく力」のかかわりを置いてありえないのである。

今回の出品作「死生共存」はそのタイトル通り、いまいった両者の関わりを音楽でもって表そうとした、というより、両者のかかわりそのものの典型的一場面を構造として持たせようとしたものである。お聴きになっていかがお感じになろうか。ご意見頂戴できればまことに幸いです。

（ここまでは２０１７.１．８）